

人はサルとどのようにつき合ってきたか

三戸幸久

日本モンキーセンター

サルを食う・サルで治す

今の日本では、サルを食う人はまずいない。

しかし、食糧が少なかった太平洋戦争時代以前までは、結構、サルを食っていた。

「サルの肉はとても美味で、例えようもないほど美味なものだ。また猿の頭の黒焼きは妙薬として珍重したものだ。」

これは十和田、大湯・白沢の猟師・木村金吾さん（90歳で昭和51年没 鹿角市史より）の証言である。植物が主食のサルの肉はクセがなくうまいのであろう。石川県の山村などでは「秋猿は嫁に食わずな」などといっていた。昔はサルを食っていたという古老の話は全国に残っている。

「サルの皮三十文、肉六十文、頭十文、肋骨八文」

これは、明治時代のころの秋田県仙北郡の寺小屋でそろばんの稽古の教材となった例である。これをみるとサルの肉は値段がよかったようである。当時としてはニホンザルの肉は食料としてはごく一般的な獣肉だったのである。秋田市では冬になるとサル肉売りが街々を歩いたという。

享保20年（1735年）雫石代官所内諸木並諸色改書上帳では「さる」「さるのい」（サルの胆嚢）が出てくる。食肉と薬種として記されている。

こうしたサルを食べていた記録は、古く縄文時代にさかのぼる。

縄文時代のヒトの生活の跡である貝塚が全国各地に残っているが、ニホンザルの骨は110カ所以上の貝塚から出土している。その多くは縄文時代後半の貝塚からで、時代に偏りが見られる。食べられていたと見てよいだろう。

出土する獣骨の中で圧倒的に多いのは、シカ、イノシシで、分量から見れば、サルはほんのわずかである。しかし、ひとたびヒトが飢えはじめるとサルも捕られ食われたのであろう。捕獲されれば、前述したように食肉として、毛皮としてさまざまに利用されたに違いない。

当時、縄文の人々は、現在も世界各地で狩猟生活を送る人々が持っているようなアニミズム的世界観に彩られた生活をしていただろう。手を食べれば手が、内臓を食べれば内臓が快癒し、丈夫になるという生命観は、後に触れるが、昭和の初め頃までサルを薬種として扱っていた風習の中に見つけることは困難ではない。

次に、食べていた、文字での記録でもっとも古いものは日本書紀であろう。

天武4年（676年）4月に、牛、馬、犬、サル、鶏の肉を食うことと殺生を禁ずる令が出されている。シカやイノシシが禁止されなかつ

たのは禁止するにはあまりにも需要が高かったからであろうか。これをさかのぼる276年前の允恭天皇期14年（400年）の記録には天皇が淡路島に行って、大鹿、サル、イノシシを狩猟したとある。狩猟後、これらの獣を食したのかもしれない。

また、くだって室町前期のものとされる庭訓往来には、サルの肉と鯉の肉は食べ合わせであるという記述などもあるから、サル肉は結構食卓に上っていたことだろう。

江戸時代に入って仏教の浸透によって獣肉食が少なくなっていたと思われる。それでも、昭和の中頃まで、ももんじ屋といういろいろな獣肉を食べさせる店が東京にもあり、その軒下にサルが四肢をくくってつり下げてあったと長崎抜天さんなどが記録している。

また、1970年の日本モンキーセンター（竹下、1970年）の第2回アンケート調査によれば下北半島のかつてのマガギ集落ではこの時（1970年）をさかのぼること約50年前には、家の軒先には例外なくサルの干し肉がつり下げてあったというし、「帰らぬオオワシ」（遠藤、1979）では、岩手県の三陸海岸沿いの狩人の家の土間にサルの首が山積みになっていたと物語の中で紹介している。

サルの肉を食べることはイノシシやシカの肉を食べると同様にかつては普通に行なわれていたことであった。

薬としての効能をみると、サルの胆は腹痛、眼病、喘息、子供の食当り、癩の虫にも効くとされ、黒焼きは強壯剤、頭痛、脳病、婦人病に、胎児は婦人病、産後の特効薬であり、睾丸は精力剤、喘息によく効くとされていた。サルの身体のある部位を食べれば、食べた人のその部位が丈夫になったり、治癒するというような考え方の中に、殺して食うことによる生命の受け渡し、あるいは命を引き継ぐといった生命観を見ることができる。現代、盛んに行なわれるようになった“臓器移植”医療の底流にもこの生命観につながるものがあるのかもしれない。

西洋医学が普及していない時代ではこうした民間薬が主流で、それは太平洋戦争後まで続いている。

サルの毛皮の評価はあまり高くはない。ちな

みに、豪雪地帯の新潟県南魚沼郡志（大正19年）が紹介する毛皮の値段は、明治25年には、^{イサ}鼬50厘、^{テン}貂500厘、^{キツネ}狐2,000厘、^{クサギ}狸2,500厘、^{サル}猿600厘で、これが明治44年では鼬1,100厘、貂7,000厘、狐5,000厘、狸6,000厘、猿800厘となっている。貂などは13年間でなんと14倍になっているが、サルはそれほど値上がりしていない。1,000厘は1円である。

「おじいさんは大正の頃から昭和にかけてサルを狩っていた。そして黒焼きを作っていた。サル猟は昭和22年頃までしていた。毛皮を下の村から買いに来る人がいた。ムササビの毛皮などは1匹分が反物1反ぐらいの値段で売れた」新潟県中魚沼郡秋山郷の山田重数さん（1912年生まれ）の証言である。

そして、戦後、高度経済成長期以降、サルを食うこともサルで治すこともなくなった。それは家畜肉の普及や食糧事情の好転、一方では西洋医学の伝播と医薬品の発達と保健知識の普及などによってである。

現在、サルたちは違う形で利用されている。医薬製造や医学のため実験動物として大量に飼育され利用消費されている。

私たちが使う医薬品のほとんどはサル類を使った実験によって世に出され、人々を救っている。このことに思いをいたせば、サルたちが人々に、過去から現代までいかに多くの命を人間に与えてきたかが理解できるだろう。

サルを飼う

サルを飼うことも古い。ただ単にサルを飼ったり、連れて歩き人に見せること自体はるか昔からあったと思われる。

平安時代に成立したといわれる「年中行事絵巻」には、猿回しが描かれている。13世紀後半にできたとされる「一遍上人絵伝」や14世紀に成立した「石山寺縁起」絵巻には既にサルがつながれ飼われているところが描かれている。有名な高山寺の鳥獣戯画のサルも飼われたサルがモデルであったようだ。

ちなみに中国ではもっと古く、ことわざ「朝三暮四」（紀元前に成立したとされる「列子」に記録）に出てくる「狙公」は、サル飼い、猿

回しのことである。

既にサルを飼っておくことは馬の精神安定上効果があったからであろう。民俗学者の故宮本常一が柳田国男から聞いた話として、野生の牛馬を飼い慣らすことは人間の手だけでは難しいため、サルを厩につないで牛馬の相手をさせる。馬や牛とサルは仲がよく、サルと遊ぶことによっておとなしくなり御しやすくなったのではないかと紹介している。厩のサルに芸を仕込んでそれを人々に見せたのが猿回しであったという。

こうしたサルを飼うという風習が社会的に位置を与えられるのは、馬の飼育との関係においてであった。厩ザルは時代がくだると、生きたサルではなく、サルの頭骨やサルの手を厩（馬や牛の小屋）に祭るという形に変わっていった。サルは生きていなくても、馬・牛の守り神として、魔除、災厄をのがれられると考えられた。

馬や牛は農家では貴重な働き手であるから、時には人よりも大事に扱われた。馬、牛の健康安全は農民の強い願いである。そのため、かつては日本のほとんどの地方に「ウマヤザル」といわれるサルの頭骨が祭ってあったという。

ところが、明治時代に入ると異なった飼い方、見せ方が登場する。動物園である。東京の上野動物園など各地に動物園ができ、ニホンザルも飼われ始める。都会の人々にとってはなじみが薄いニホンザルの群れ飼育も、サル山という形式でされるようになる。どちらかといえば知見を広めるための飼育展示施設ではあったが、見る側としては、好奇心を楽しませ、笑わせてくれる動物として、わずかばかりの心のゆとりなどを得ていたわけで、それまでの猿回しのサルを見る姿勢と大した隔たりはなかった。

そして、終戦後、今度は山に棲む野生のサルを餌づけして人々に見せる野猿公苑が登場する。当時少なくなっていた珍しい野生ニホンザルの群れを檻も柵もなしで見られる施設として脚光を浴び、観光開発も手伝って多いときで全国で30以上開苑していた。

しかし、この間、日本の高度経済成長期に入り、人々の目はよりおもしろい各種レジャーに

移り、野猿公苑は閉苑に追い込まれていった。

次に、外国の珍しく、小さなサルや野生動物が動物業者の手によって海外から輸入されるようになる。今度はそれをペットとして家で飼育する人が現れる。人畜共通伝染病などの知識も、野生動物の絶滅の危機にも無頓着なままブームを迎えている。

これらのブームの影に動物園があったことは間違いないだろう。餌をあげることがかわいがることだと思い、それを野生動物への愛情だと考える。この前時代的価値観を動物園は払拭し、ワシントン条約に違反する密輸入や人畜共通伝染病の危険、何よりも野生動物をペットにはいけないことを教育内容にしなければならなくなっている。にもかかわらず、こうした危険なブームをなかなか批判しない。それどころか動物園関係者があろうことか「ゾウも飼いたい、ワニも飼いたい」などというペット志向をあおる本まで出版している事態は深刻である。

今私たちが問わなければならないのは、野生動物をなぜ飼わなければならないかということである。その目的は、決してペット化することではないはずである。なぜなら、こうした行為は野生動物に対する正しい理解につながらず、高利な売買の対象になることによって彼らを絶滅の淵に追いやっているからである。

最後に触れるのは、現在のサル類飼育のもっとも大きな組織は医療関係機関だろう。前に触れたように私たちの医療・医薬にサル類は欠かせない存在である。私たちの代わりとなって実験台となり安全で効果的な医療・医薬の成立に一役も二役も買っているのである。

今、野生動物を飼うことの意味は大きくて深く、そして重い。

サルが食う

日本列島に農耕が伝来して以降、農作物に対するケモノによる害は多かったと思われる。当初、稲作が行なわれた地帯とその周辺の平野部は、シカ、イノシシなどほとんどの地上性のケモノたちにも生活の場であったわけ

であるから、その一角が、季節になるとうまい食べ物がかたまるといふことになれば、彼らがそれを見逃すはずはなかったろう。以降、人口の増加とともに稲作地はまたたく間に平野部全域に及び、それにともなうて獣害を受ける地域も拡大していったと思われる。

和銅年間に編纂されたという風土記の一つである豊後（現在の九州、大分県地方）風土記にも以下のような話がある。

速見の郡

頸の峰 柚富の郡の西南にある。

この峰の下に水田がある。もとの名は宅田であった。この田の稲を鹿がいつも食っていた。それで田主は柵を作って待ち伏せしていた。すると鹿がやってきて、その頸をあげて柵の間にさし入れてたちまち苗を食いはじめた。田主は捕らえてその頸を切ろうとした。

このあと、この鹿は命ごいをして、助けられ、その代わりに、苗を食わないことを誓い、以来その田は豊かな実りを得るようになったという。

人間が土地を農耕作地として使うようになって以来、植物食性を持つ地上性ケモノたちをはじめとして鳥類、昆虫類などと、農作物（この時点では主に水稻）をめぐる争奪戦は連綿と続くことになった。

さて、ニホンザルたちはどうであったのだろうか。これまでのところ私の調べでは、奈良～平安～室町期を通じて、農作物への害を与えるケモノとしてサルはほとんど登場していない。

ほかに、平安末期の作とされる今昔物語集には、宝倉へ乱入したサルの群れの話（巻26、飛驒国、猿神、止生贅語）や人の子供をさらう話（巻29）が載っているが、畑を荒すケモノとしては出てこない。唯一、「サルカニ合戦」ではサルが、栽培されているらしい柿を食い荒らす場面が出てくるぐらいである。また、この頃成立したと思われる昔話に、耕作を手伝う猿婿の話が出てくる。これらを見る限り、作物害獣として位置づけられていたわけではないと思われる。

当時サルからの農作物被害がなかったとは思われないが、平野部における農耕作の当初からの獣害の主役はやはりシカ、イノシシで、ほかにネズミ、ウサギなどであったと思われる。

サルが、はっきりと作物害獣として記録されるようになるのは江戸時代に入ってからであろう。各所の農書に被害を起こす獣としてシカやイノシシに並んでサルが登場する。

天候不順で収穫が悪い年には、やはり鳥獣たちが棲む山の稔りも悪いことが多く、そうした年はサルたちは早めに、暖かく稔りが多い里山に降りてきて、人間の作物をいただくこととなった。

これは今後の課題でもあるのだが、江戸時代より前の農耕作地は、主に大きな河川が作り出した扇状地である平野部に限られていたのが、江戸時代に入ると野や山も耕作地としての対象になり、開墾・開拓されて獣たちの生息圏に深く入り込むことによって必然的に獣の害が多くなっていったものと思われる。

水稻耕作が始まるはるか以前から、ニホンザルの群れの生活の場は山野であり、平野部にはなかったのではなかろうか。

サルを追う

サルたちは毎日のように田畑にやってきた。人間も必死に田畑を防衛した。

獣によって収穫予定の作物が食べられてしまうことは、かなりのダメージである。それによってただちに人間が飢え死ぬことはなかったにしても、食糧事情の悪化に追い打ちをかけたに違いなく、悪い条件が重なれば飢饉にもつながったと思われる。

食害をもたらす獣を、現在のように全頭捕獲したり、根こそぎ射殺できるような時代ではない。効果的な対策を打つためには、いかにサルたちの習性を観察して、前もって追い払うかにかかっていた。田畑に人間がいないときに、サルたちを近寄らせないようにするにはどうしたらよいのか、さまざまな悪戦苦闘を江戸時代の農書や記録にから拾ってみた。

焼畑の場所へ廬を結び、季春より初冬に至るまでは、夫妻子母代るへこゝに移住して、平道又は一里も二里も隔りたる山の中腹、或は谷間に居れり、禾塾の時に至りては、昼は猿を防ぎ夜は鹿を逐ひ、夫妻みな処を異にし、あなたこなたと山を踰へ谷を隔てゝ、仮小屋に通ひて夜なへ板木を打、或は聲をあげ、猪鹿を防こと疾風雷雨にも息ふことあはず。(新編武蔵國風土記稿. 卷之二百六十五. 秩父郡之十九. 二十秩父郡の項. より引用)

これは、秩父盆地山間部の山村(現在の埼玉県秩父郡中津川村)の焼畑で、害を与える主な獣はシカ、サル、イノシシ。主な被害作物はアワ、ヒエ、ダイズ、アズキ、ソバである。起稿された時代は、文化7年(1810年)。

次は、越後の國秋山郷(現在の新潟県中魚沼郡秋山郷)で、記録した人は鈴木牧之。時代は文政11年(1828年)9月。

遠く村屋を離たる山畑には必小屋懸ありて、裾より茅を以葺上て、昼は女、夜は男、替るへ猪・猿の畑を荒すを追はんが為に、小屋の外には狗を放し置に、獣出れば必此犬吠追ふと云う。故に秋山にては、家一軒に一つ宛飼置となん。(鈴木牧之著. 宮栄二校注. 秋山記行, 1987. 東洋文庫. 平凡社. より引用)

被害を与えていた獣はサル、イノシシで、主な被害作物はアワ、ヒエ、ソバで、やはり焼畑作物である。

次は、青森の下北半島脇野沢村滝山での出来事。記録した人は菅江真澄。時代は寛政5年(1793年)4月27日。

山ふふきの茎をさき、それに米ぬかをふりかけて日にほし、雨が降りそうだととりおさめている老婆が言うには、『この山里は、鹿、猿がおろけて、粟穂、稗穂、豆、蕎麦など、みなしごいて食うので、収穫できず、このような草もかてについて生活しているが、時には食物が付き、飢えることがある』と嘆くのを聞いて涙が落ちた。(菅江真澄, 1986. 菅江真澄遊覧記 東洋文庫. 平凡社. より引用)

被害を与える主な獣はシカ、サルで、主な被害作物はアワ、ヒエ、マメ、ソバである。

次は、駿河の國戸倉(現在の静岡県戸倉)で、記録した人は司馬江漢。時代は天明戊申(1788年)5月28日。

ばゝの云ふ様は一爰はまあお聞きなされまし、米とては一粒もなし、ヒエ^{ヒエ}麥に芋の食にいたします。其上塩か拂底味噌など得がたく、生魚とては見たる者一人もござらぬ、昼は猿のぼんをいたし、夜は猪を追ます。ご覧の通り、畑の廻りにかこひをいたします。猿は其かこひを飛越して、麥やヒエをあらしますと話しける。(司馬江漢, 1970. 江漢西遊日記二. 日本庶民生活資料集成2. 三一書房. より引用)

被害を与える主な獣はイノシシ、サル。記録されている被害作物はムギ、ヒエ。

このほかにも「会津農書」や「三河農書」、「防長風土注進案」、「農業全書」にも見られる。

農業全書(宮崎安貞著)では、

山中に穀物を作れば鹿鳥などにそこなわれ、利をうしなふ事おほし。農人其所のあしきならばしにしたがひて、利潤なく地にあはぬ穀物をして作る誤りも所々ある事なり。

と、山の中に田畑を作ることの不利を説いている。

以上のように、当時の農夫たちは、命を懸けてアニマルウォッチングをしていたといつてよい状況にあった。人々は昼はサル、夜は寝ずの番をしてシカやイノシシの来襲を警戒し、そして、犬などもけしかけ、追い払うのに懸命だったのである。そして、人がいないときにはどうしたら近寄らせないようにできるか、鳴子、シシ脅し、弓の弦を鳴らす、焼きしめなど、どのような工夫をしたらよいのか、いろいろな対策が試みられたことであろう。

そして興味深いのは、獣追いの多くは老人たちの役目でもあったことである。力仕事や子育て、村の主な仕事は壮年の男女が担い、獣追い

や来襲を知らせる役目などを担っていたようである。司馬江漢の紹介する物見櫓に村の老人が立つことがあったのではなかろうか。

現在の私たちの想像をはるかに超えたエネルギーが、鳥獣たちから農作物を守るために費やされていたことは確かだ。獣たちを追い払うことは、ほかのつらい仕事と同様に手抜きをすることができない農事の一つとして位置づけられていた。

江戸時代は、まさに、獣と人間の知恵比べ、根比べの激しくも静かな攻防戦が延々と繰り返されていた時代だった。

おわりに

戦後、高度成長経済期に入って、日本ではサルは獲って食われなくなり、特に山村農作地では高齢化、過疎化が進んで、農作物被害に拍車がかかっている。

獲られることはなく、しかも栄養豊富な農作物を食べればサルたちが増えてくるのは必然で

ある。私たちは今、野生鳥獣の保護と農作物の保護をいかに両立させるかで悩んでいる。

野生動物を代表とする豊かな自然を守るのか、私たち人間の生活を守るのか、果たして両者は両立するのか。もっともっと知恵を絞り、アイデアを出し、労力をつぎ込む必要があるだろう。21世紀の大きな課題である。

参考文献

- 遠藤公男, 1979. 帰らぬオオワシ- 獵師七兵衛の物語-, 234pp. 偕成社.
- 司馬江漢, 1970. 江漢西遊日記二. 日本庶民生活資料集成2. 三一書房.
- 新編武蔵国風土記稿. 卷之二百六十五. 秩父郡之十九, 二十.
- 菅江真澄, 1986. 菅江真澄遊覧記3. 東洋文庫. 平凡社.
- 鈴木牧之著. 宮栄二校注. 秋山記行, 1971. 東洋文庫. 平凡社.
- 竹下完による1970年のニホンザル分布資料. 京都大学霊長類研究所保管. 未発表.